

撫育方の論理とその社会的機能

立石智章

本研究は、思想の社会的機能を儒学思想、とくに徂徠学との関連において捉えようとする試みである。

幕藩制における支配原理と儒学思想との関連については、尾藤正英氏以来、両者を等式的に捉える考え方は、否定されたとみてよい。むしろ、近世儒学思想を幕藩制身分秩序の思想とみる衣笠安喜氏のように、その社会的機能に即して理解されるようになった。

ところで、十八世紀後半における徂徠学は、一般に挫折と衰退というイメージで語られている。あるいは、朱子学と使い分けられる支配者の智としてのみ評価されるのであり、そこからは社会との積極的関わりを見ることは困難である。このような理解は、一面的なものだと言わざるを得ない。

本研究は、萩藩宝暦改革の一環として創設された撫育方を素材として取り扱う。これまで、政治史・財政史の観点から言えば、一定の研究蓄積を持ち、近年では過重な収奪によって士民の批判に曝されていたことが指摘されている。もちろん、そのことは一面では事実であり、史料上からも撫育方批判の記事は散見される。しかし、それでは何故撫育方が維新まで存続し得たのかという問いには答えられないであろう。それには、その社会的機能が問われなければならない。

第一章は、坂時存の「遺塵抄」「三老上書」「七箇条上書」を手掛かりに、彼の構想と実際の撫育方との関係を見ていく。

そこでは、両者の決定的差異としての利殖の考えの有無が意識される。利殖を肯定する考えとして登場するのは、仁徳による統治である。「王道」が廢れてしまったという認識に立ち、「管子」の場合のような權謀術数による統治である「霸道」を積極的に肯定していこうという考え方である。そして、徂徠学との交渉を意識しつつ、「霸道」を肯定し、人作説に転化する可能性を常に孕んだ「作為」の論理が撫育方肯定の論理として働いたことが明らかにされるであろう。

しかしながら、「作為」の論理が意識の上で人作説に転化されることは、幕藩体制への批判に繋がりがかねず、「家法」や「聖賢の遺法」を根拠としての撫育方批判の論拠ともなりうる。第二章では、徂徠学の儒者瀧鶴台の「三乃逕」「老子抄」を取上げる。ここでは、現実に対して積極的に働きつつ、「作為」が意識の世界において剥き出しの人作説に転化することを抑制する「無為」の論理を提示する予定である。

人作説は、意識の世界においては否定されるべきものであったが、意識の外の世界では現実には人作説への転化をはじめめていたのではなかろうか。第三章は、恐らく文化・文政期に著されたと思われる「某氏意見書」と「世評内論」、それに村田清風の意見書から、「無為」と「作為」の論理の行方を探る。そして、撫育方が社会的に果たしていた機能とは何であったのかを解明したい。